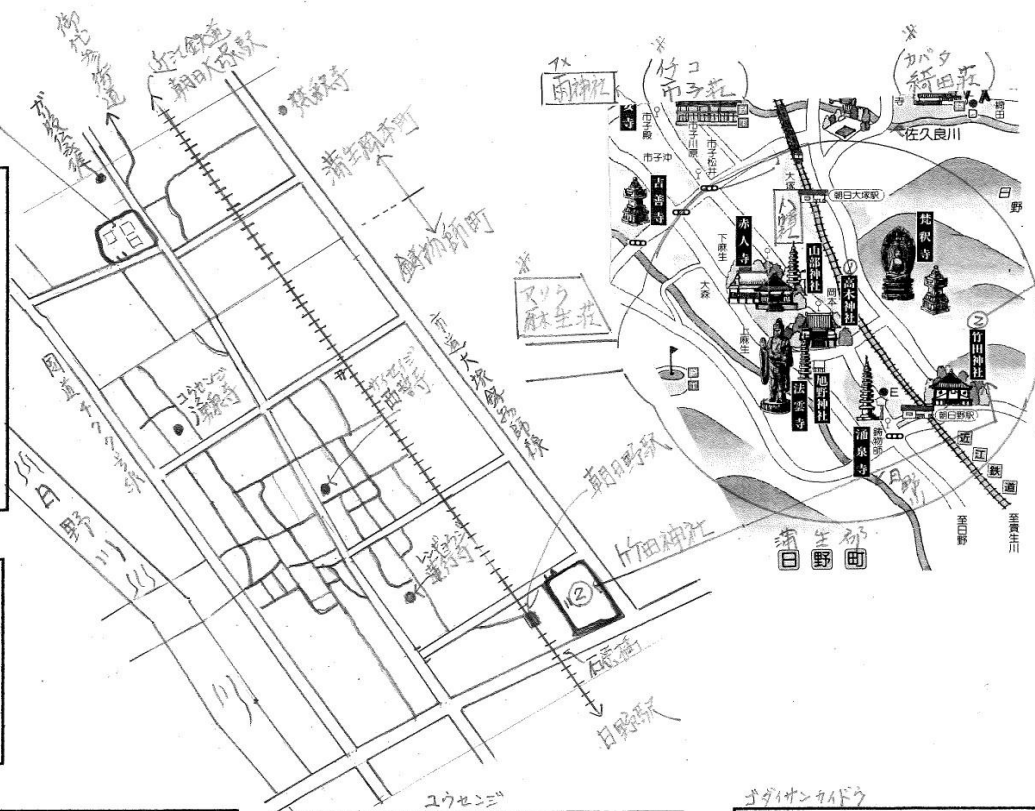




時代を超えてたたずむ蒲生の社を訪ねて 五百年前に建てられた本殿が5棟も!! その魅力に迫る

・・・ 連綿と続く惣村(地域共同体)の中核をなす鎮守の建物の特色と魅力

そして地域の風土を探る・・・



①高木神社本殿(重文)・境内社日吉神社本殿(重文)
高木神社は旧麻生庄の総社であり、社伝によると神龜2年(724)に創建され、古くは高岡宮と称したと伝わっています。
高木神社本殿は、正面3.9m、奥行2.4mの母屋に、奥行1.5mの前室を設け、向拝を付けた「前室付き三間社流造」で簡素ながら各部の様式や、丸鑿を使った木鼻や手狭の彫刻に室町時代の特徴が表れています。日吉神社本殿の厨子に、永正9年(1512)の墨書があり、両本殿とも室町時代の永正頃に建立されたものと考えられます。

①高木神社石燈籠(重要文化財)
六角形燈籠で高さ2.2mあり、各部全てが揃っています。火袋には正和4年(1315)の刻銘があり、この頃(鎌倉時代)に造立されたと思われます。この石燈籠は各部よく揃い調和がとれており、鎌倉時代に造立された石燈籠の中でも県内を代表する一例です。

①麻生荘・けんけと祭(国選択民俗文化財)
けんけと祭は、岡本、上麻生、下麻生の春祭り、毎年4月23日に近い日曜日に合同で行われます。祭りは、子供の踊り子によるカンカという一種の囃しものとケンケ組による長刀振りの芸能が演じられます。子供は、黒紋付きに色紙で作られた被りものをした少年が鉦・太鼓などをもち、ケンケ組は、明るい紺の襦袢に黒の角帯締め、鈴の付いた緑の網を腰に巻き、手甲、脚絆をした青年が長刀をもつ。渡りの行列内に大太刀に7本の丸帯を掛けた「帯」があることからこの祭りが「帯掛け祭り」と呼ばれています。

②湯泉寺石造九重塔(重要文化財)
湯泉寺は、桓武天皇の創建と伝えられその後元禄5年(1692)に再興された臨済宗の寺院です。境内東隅に建つ九重塔は花崗岩製で、塔身の刻銘から鎌倉時代の永仁3年(1295)に造立されたことがわかります。この塔は、屋根の通減が少なく均整がとれており、鎌倉時代在銘の九重塔として大変貴重です。

②御代参街道(岡本宿)
江戸時代に東海道の土山宿と中山道の愛知川宿とを結ぶ間道として整備されました。街道の名前は朝廷の使者が多賀大社と伊勢神宮へ入参する際に通ったことに由来します。八日市、岡本、石原、鎌掛に宿場が置かれました。岡本宿には、古絵図や、枡屋・樽屋・山形屋・和泉屋・角屋など多くの屋号が残っており当時の様子がうかがえます。

②竹田神社男神坐像(重要文化財)
竹田神社は、崇神天皇の頃に創建され、寛仁元年(1017)に現在地に移ったと言われています。社伝では、この神像は、この地を開いた蒲生稻置三麻呂の夫婦像との説もありますが、2軀とも男神像と言われます。神像とは、仏像彫刻の影響を受けて生まれたもので、本像もその一例です。像高は29.4cmと小さい像で、一木からつくられ平安時代の作と考えられています。

②竹田神社本殿
本殿は、正面4.5m×奥行4.2mの母屋に、向拝を附加した規模の大きい建物で、屋根は銅板葺きです。棟札によって享保16年(1731)に京都四条の大番匠、谷口五兵衛重治により建築されました。本殿形式としては、比較的少ない入母屋造で、木柄も太く良質の樺材を用い、裏股、手挟・木鼻などの細部彫刻の意匠も優れた建物です。江戸時代における京大工の手になる本殿として重要です。

②竹田神社能舞台(東近江市指定)
能舞台は鋳物師の竹田猪八郎が豊臣秀吉の時代に奉納された「竹田の神能」にちなんで、明治26年(1893)に寄進しました。舞台は、日野町野出の太工、川西藤吉が、橋掛り・鏡の間は日野町三十坪の太工、戸田松之助が造りました。後座の背面を飾る鏡板には定型の老松が描かれています。